

ランチョンセミナー4

11月15日（土）12:00-13:00 第4会場（3F 中会議室 301B）

共催：PHC 株式会社

外注検査用の凝固検査検体取り扱いコンセンサス作成に向けて

座長：野中 拓（長岡赤十字病院 医療技術部検査技術課）

演者：松田将門（福島県立医科大学 保健科学部臨床検査学科）

凝固検査では、「検査の質は検査前で決まる」とされるほど、検査前の検体取り扱い手順が結果に大きく影響する。具体的には、検体の搬送や保存などの手順である。従って、患者の病態を正しく反映した検査値を報告するには手順の規定が必要であり、それにはまず、手順の違いが検査値に及ぼす影響を調べる必要がある。

凝固検査における検体取り扱い手順の規定は米国や英国から発表され、本邦でも日本検査血液学会（JSLH）が発表した「凝固検査検体取り扱いに関するコンセンサス」がある。しかし、これらの規定は院内検査に対するものであり、外注検査に特化した規定はほとんどない。外注検査では、院内検査よりも、採血から測定までの時間が長い／工程が多いことを考えると、外注検査に対する規定が必要である。

演者らは JSLH の標準化活動として、外注検査の環境を模倣した条件下で検体安定性の検証実験を行った。本講演ではその結果を概説し、外注検査に適する手順を考えたい。